

将来予測について

21世紀末の予測：

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書^{※1}で用いられた2つのシナリオ（RCP2.6とRCP8.5）に基づく、20世紀末と比べた21世紀末^{※2}の予測を記載しています。

RCP2.6シナリオ：

将来の世界平均気温が、工業化以前^{※3}と比べて約2°C上昇することが想定されているシナリオで、

「2°C上昇シナリオ」

と表記しています。

パリ協定の2°C目標が達成された世界

に相当し、IPCC第6次評価報告書では、SSP1-2.6シナリオに近いものです。

温暖化の程度に応じた予測：

20世紀末^{※2}では100年に一回の頻度で発生していたような大雨が、工業化以前^{※3}と比べて世界平均気温がそれぞれ1.5°C、2°C、4°C上昇した場合、どれくらいの頻度で発生するかを記載しています。なお、ここでは1日の降水量（日降水量）を解析しています。また、2°C上昇シナリオと4°C上昇シナリオにおいて、1.5°C、2°C、4°Cそれぞれの温度上昇が見込まれる、およその年代をそえて解説しています。

※1 最新のIPCC報告書は第6次評価報告書ですが、日本付近の予測で参考可能な結果の多くは第5次評価報告書に基づくためです。

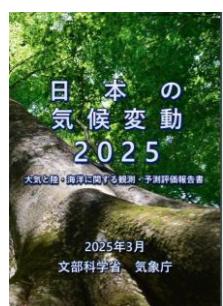
※2 「21世紀末の予測」で用いる、20世紀末は1980～1999年（海面水温は1986～2005年）の平均、21世紀末は2076～2095年（同、2081～2100年）の平均です。「温暖化の程度に応じた予測」では、20世紀末は1981～2010年です。

※3 工業化以前は1850～1900年の平均です。

全国の情報はこちら

日本の気候変動2025

（文部科学省・気象庁、令和7年3月公表）



日本の気候変動の現状と
予測に関する最新の知見を紹介
気象庁ホームページからご覧ください↓



気候変動の影響と適応

気候変動適応情報プラットフォーム (A-PLAT (国立環境研究所))

気候変動は様々な分野に影響を及ぼします。具体的な影響やそれに対応するための適応策については、A-PLATも参照ください。



A-PLAT



A-PLATの
ホームページ

気候変動適応

検索

愛媛県の気候変動

気温の上昇



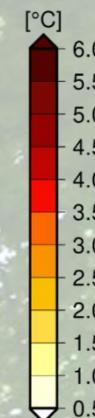
2°C上昇シナリオ



雨の降り方の 極端化



4°C上昇シナリオ

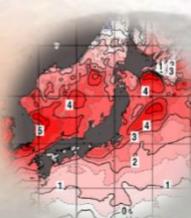


年平均気温の将来予測（21世紀末）

20世紀末からの上昇量（シナリオ等の詳細は裏面参照）

狭い領域の変化は不確実性が大きいため、都道府県程度の広範囲の変化に着目ください

海面水温の 上昇



台風強度の 増大



このリーフレットでは、「日本の気候変動2025」（文部科学省・気象庁）に基づき、これまでの気候の変化と将来予測に関する情報をまとめています。

四国地方の気候の変化については、気象庁ホームページからもご覧になれます。



気象庁ホームページ「日本の各地域における気候の変化」

令和7年3月
松山地方気象台



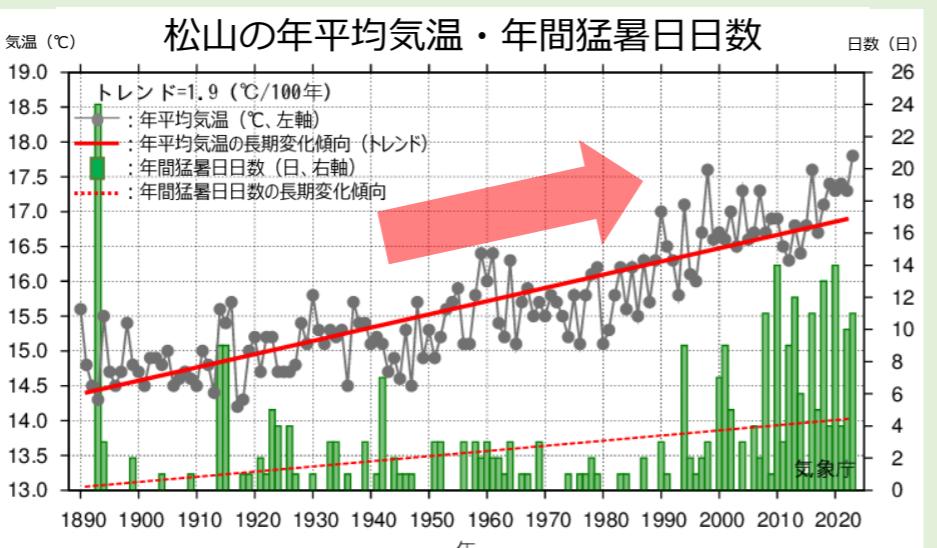
松山地方気象台 愛媛県松山市北持田町102 TEL: 089-933-3610

気温の上昇

これまでの変化

100年あたり
1.9°C 上昇*

*右のグラフのデータから算出した
100年あたりの平均的な上昇率です。



21世紀末の予測

熱中症等のリスク増加

愛媛県の年平均気温は、20世紀末と比べて、

2°C上昇シナリオで約1.3°C、**4°C上昇シナリオで約4.1°C** 上昇

年間猛暑日日数 約6日 / 約31日

年間熱帯夜日数 約27日 / 約73日

日数は左から、愛媛県平均の20世紀末の観測値、21世紀末（2°C / 4°C上昇シナリオ）の予測値

猛暑日は日最高気温が35°C以上の日です。

熱帯夜は夜間の最低気温が25°C以上の日を指しますが、ここでは便宜上、日最低気温が25°C以上の日を熱帯夜として扱っています。

海面水温の上昇



21世紀末の予測

四国・東海沖の年平均海面水温は、
20世紀末と比べて、

2°C上昇シナリオでは約1.01°C、
4°C上昇シナリオでは約3.04°C 上昇

四国・東海沖が示す海域は、気象庁ホームページ「海面水温の
長期変化傾向(日本近海)」を参照ください。

台風強度の増大



将来予測^{※1}

日本付近の台風強度^{※2}は**強まる**
台風に伴う降水量も**増加**



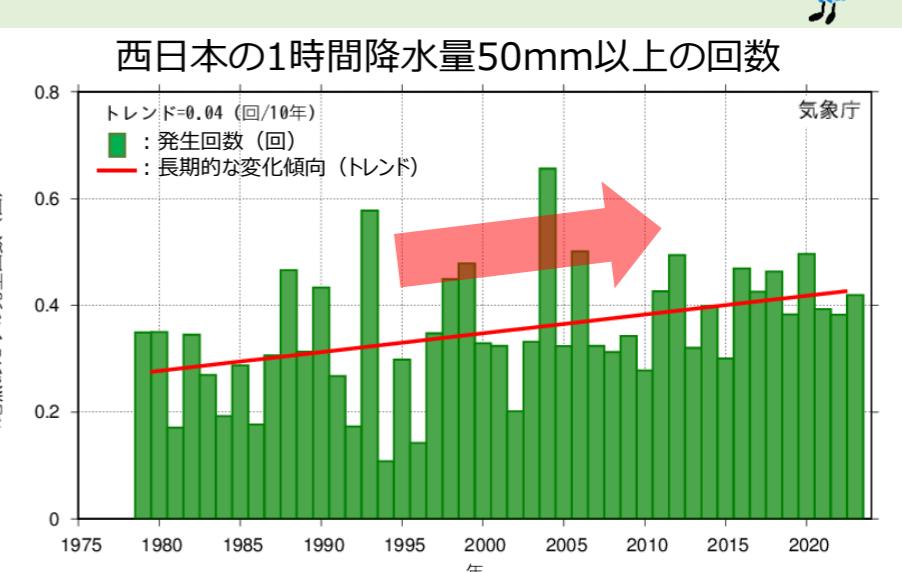
※1 溫暖化に伴う台風の変化を解
析した様々な研究結果に基づきます。
※2 中心付近の気圧または風の強さ

雨の降り方の極端化

これまでの変化

増加しています

気象庁では、甚大な被
害をもたらした「平成30
年7月豪雨」には、地球
温暖化に伴う水蒸気量
の増加も影響したと評価
しています。



21世紀末の予測

傘は全く役に立たなくなる
ような降り方です

土砂災害や渇水等
のリスク増加

20世紀末と比べて、四国地方の
1時間降水量50mm以上の年間発生回数は、

2°C上昇シナリオでは約1.7倍、**4°C上昇シナリオでは約2.4倍**に増加

雨の降らない日は年間で、**4°C上昇シナリオでは約11日** 増加

2°C上昇シナリオでは変化傾向は見られません

温暖化の程度に応じた予測

各シナリオにおける
おおよその年代

2°C上昇シナリオ
(SSP1-2.6)

4°C上昇シナリオ
(SSP5-8.5)

20世紀末には100年に一回しか起らなかった大雨^{※1}が**より頻繁に**

四国地方
の予測

温暖化の程度

1.5°C上昇

2°C上昇

4°C上昇

20世紀末
2033-2042年頃
2018-2037年頃

※2
2032-2051年頃

2075-2094年頃

100年当たり
の発生頻度

1回

約1.7回

約2.1回

約3.5回

観測データ^{※3}による推定では、
100年に一回の大雨（日降水量）
は、松山では約233mmです。
温暖化が進むと、こうした大雨が
より頻繁に発生します。

※1 ここでは日降水量に基づく結果を示します。
※2 2031-2050年頃に2°C上昇となる可能性があります。
※3 1976-2023年のうち利用可能な観測データです。

詳しい情報は、気象庁ホームページ
「極端現象発生頻度マップ」をご覧ください。

